

強迫傾向と孤独感が適応感に及ぼす影響

福祉心理学専攻 臨床心理学分野

遠山知優

要 旨

本研究では、大学生・大学院生を対象とし、強迫傾向、孤独感、適応感に関する質問紙調査を行った。その結果から、強迫傾向と孤独感が適応感に及ぼす影響について検討し、強迫傾向と孤独感はどちらも適応感に影響を与えているということが示唆された。

本研究において強迫傾向尺度の第1因子として確認された「優柔不断・疑惑・制御」が適応感に有意な負の影響を与えていることが明らかとなった。この結果から、強迫性障害において、強迫行為、強迫観念と呼ばれる典型的な症状の中でも、「優柔不断・疑惑・制御」が適応感に有意な負の影響を与えているということが明らかとなった。また、本研究において日本語版 UCLA 孤独感尺度の第1因子として確認された「孤立感」が適応感に有意な負の影響を与えていることが明らかとなった。また、本研究において日本語版 UCLA 孤独感尺度の第2因子として確認された「対象の不在」、第3因子として確認された「共通性の不足」が適応感に有意な正の影響を与えていることが明らかとなった。この結果から、一概に孤独感といえども、「孤立感」といった適応感に有意な負の影響を与える因子と「対象の不在」、「共通性の不足」といった適応感に有意な正の影響を与える因子が存在するということが本研究で明らかになったと言えるであろう。本研究では、先行研究より、強迫傾向、孤独感は、ともに適応感に対して有意な負の影響を与えるだろうと考えて研究を行ったが、強迫傾向に関しては、「優柔不断・疑惑・制御」の1つの因子のみが適応感に有意な負の影響を与えているという結果が得られ、孤独感に関しては、適応感に有意な負の影響を与えている因子だけではなく有意な正の影響を与えている因子も見られた。そのため、適応感に与える影響因として、強迫傾向と孤独感について、新たな視点を導き出すことができたという点で本研究は、臨床的意義があったと考える。

今後の課題として、以下3つのことが挙げられる。

1つ目は、本研究で用いた強迫傾向尺度についてである。本研究で用いた強迫傾向尺度について、信頼性係数については高い値が得られたが、因子構造を見ると強迫傾向を測る尺度としては妥当であるとはいえないと考えられる。本研究では、李・下山(2008)の強迫傾向尺度の日本語訳が適切ではないと考えられる項目や現代にそぐわない表現をしていると考えられる項目の訂正や削除を行ったが、もう少し慎重に行うべきであったとも考えられる。そのため、本研究で用いた強迫傾向尺度については更なる検討が必要であると考えられる。

2つ目は、本研究で用いた日本語版 UCLA 孤独感尺度についてである。本研究で用いた日本語版 UCLA 孤独感尺度は、一次元的尺度として用いられているが、先行研究では、日本語版 UCLA 孤独感尺度を二次元尺度や三次元尺度として解釈するべきなのではないかという考えもある(落合, 1983)。そのため、本研究では日本語版 UCLA 孤独感尺度において因子分析を行った。その結果、本研究では日本語版 UCLA 孤独感尺度を3つの因子からなる

尺度として捉え、検討を行うことが妥当であると判断した。しかし、本研究では日本語版 UCLA 孤独感尺度について、3つの因子が確認されたが、本研究において調査に協力していただいた方々の性別や学年の偏りが大きかったことから、調査の対象者を変更したとしても同じような結果を得ることが出来るのかというところについては疑問が残る部分でもある。そのため、日本語版 UCLA 孤独感尺度を用いた今後の継続的な研究が必要であると考えられる。

3つ目は、本研究において、孤独感の中でも「孤立感」が適応感に有意な負の影響を与えていることが明らかとなり、孤独感の中でも「対象の不在」、「共通性の不足」が適応感に有意な正の影響を与えていることが明らかとなったことについてである。この結果、孤独感の中でも、「孤立感」といった適応感に有意な負の影響を与える下位尺度と「対象の不在」、「共通性の不足」といった適応感に有意な正の影響を与える下位尺度が存在するということが本研究で明らかになった。本研究では、先行研究から、孤独感をネガティブな経験として捉えたが、心理的に一人でいることは、自立という意味でも重要なことであるとも考えられる。また、海野・三浦（2008）の調査では、大学生は“ひとりの時間”を、孤独や淋しいといった否定的イメージだけでなく、さまざまな肯定的イメージも持っていることを明らかにしている。先行研究から、孤独感是否定的なイメージだけではなく、肯定的なイメージも持つため、そのことを認識した上で孤独感に関する研究を今後は行うべきであると考え。また、青年期の孤独感の様相を明らかにするためにも、本研究において、海野・三浦（2010）同様に、青年のひとりで過ごすことに関する感情と評価の関連についても調査すべきだったと考える。そのため、今後孤独感に関する研究を行う際には、気をつけたいと考える。